

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和4(2022)年
5月号
通巻621号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和4年5月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



▲青山法義さん写



▲山崎正知さん写

大倭の鏡池にはいつもアオサギが来ている。
あ、電柱にとまった！

講演会「紫陽花邑をめぐる日本のユートピア」より (於：東京)

紫陽花邑に流れる精神 ① 〈全3回〉

昭和46(1971)年4月25日

法主 矢追日聖 (満59歳)

法主 今、紹介していただきました矢追日聖でございます。この紫陽花邑に流れる精神とかいうのは、どうもやりにくい話でございます。私は紫陽花邑の中に流れているひとつの精神のようなものは全然、自覚しておりません。
ただ気の向くまま、いわゆる風まかせという人生のあり方で、この歳まで生きながらえてきたわけでございますから、

肉体を持たない人間の友

岸田哲(司会) では引き続き、紫陽花邑の矢追日聖さんに「紫陽花邑に流れる精神・古代大和思想」と題して話していただきます。矢追さんについて、どなたかご紹介してもらおうかと思ったんですけれども、むしろ矢追さんご自身に語っていただいたほうがいいだろう、ということでご直接話していただきます。よろしくお願いたします。(会場拍手)

今を去ること51年前の昭和46年4月、東京にて法主の講演会が開かれました。この時の講話を今号より3回に分けて掲載します。当時の『すさのお』紙が1頁を割いて報告した講演会のようすも今号4頁に再録しました。開催主旨や共同講演者・水津彦雄氏の紹介をはじめ、道中のハプニングなどにも触れられておりますので、併せてご覧ください。また、法主自身が書かれた講演会の前日および当日の日記もあり、それぞれ次号と次々号に掲載する予定です。(編集部)

別に哲学もございませぬ。水津さんみたいに学者であればかつこよく、みなさんが理解できるように話せるのかも恐れませぬけれど。

今日は、ちよつとこう袴履はかまいて、羽織うで着て来ましたが、こういう場所にこんな格好であなたたちの前に立つの、どうも苦手でございましてね。講演とか聞いたら、なおさらびびつてしまうんで、あなたたちを対象じゃなしに、私自身の寝言として、気随気儘きずきずみな話をさせてもらおうと思います。これから私の話す寝言の中に、あなたたちの持つておる何かに触れるものがある、それがまた人生の何かに於いて、迎え水の役目になれば結構だ。それだけのことでございませぬ。

何かから申し上げていかわかりませぬので、転ひ徳利とくみたいにも、もう口からでまかせに話をいたします。別に筋もございませぬ。とにかく持ち時間として与えられた1時間を潰さしてもらいます。何を言ひ出すやらわかりませぬが、その点はひとつ、ご了解願ひます。

私の場合、生きておる世界がみなさん方と全然違つております。違つた世界からあなたたちにも言つたつて、通じないことが多いんです。それで私は寝言と、こう言つております。

今、ここに立つているのは私一人でございますが、肉体を持つてゐる人間と肉体を持つてゐない人間、多くの仲間と付き合いがあります。この両方の人たちの世界で私はずっと生活してきております。あなたたちの言葉を借りれば、私はおそらく精神分裂症ということになるでしょう。でも、医学的に私は分裂じゃありませんが。

東京におつては命ないぞ

私も昭和19年まで、東京の空気をだいぶん吸わ

せてもらいました。当時、財団法人を主宰してまして、この近くの大久保・百人町に、丸い玉の付いた屋根の「金の玉御殿」と言ひますか、「大久保のお化け屋敷」と言ひますか。東京に住まいしておられた古い方ならご存じかもしれません。とにかく得体の知れない3階建ての面白い家があつて、そこに私おりました。

ちょうど昭和18年の12月でございましたが、その時分に私の友達……姿のない、肉体を持たない友達から「もういいかげん大和へ帰れ。東京におつては命ないぞ」と注意されました。

これは神さんでも仏さんでもない、霊界人です。今でこそ肉体を持つていませんが、少なくとも千二、三百年前は肉体を持つてこの世に生きていた。その人間の言わば靈魂ですね。大和へ帰つて何をやるんや、と霊界人の友達に尋ねたら「百姓したらいいいやないか」と言ひわけです。

私は朝起きると、三方を並べて榊さかきも供えた祭壇の形の前で柏手を打ち、付き合いのある霊界人たちに朝のあいさつするのが習わしです。

で、その昭和18年12月のある朝、いつもどおりにあいさつをしたら、目の前に大都會が出てきた。暗示と言ひますか、妄想、幻覚に近いものなので的確にはわかりかねますが、目をつぶつても開けても見える。この光景は上空より見た東京の街だと思ひます。

すると、その大都會へ真っ黒な胴の飛行機が密集して飛んで来て、焼夷弾を落とす。落とされた場所はいっぺんにボーツと焼けてしまう。次から次へと飛行機が飛んできては、いわゆる波状的に攻撃を繰り返して行く。

その頃、私も隣組の役を持たされまして、ハエ叩きのような火叩きですか、それを持つて防空演習の時に走つとりました。例えば、ここに焼夷弾

が落ちて火が出たら火叩きで叩くとか、猿みたいに並んでバケツ一つ一つ送つて水をかけるとか、毎日そんな訓練ばかり。家に焼夷弾が落ちた場合は、板塀にパツとくつくと火が出るんだから砂を被せる、とかね。年配の方はよくご存じかと思ひます。

そういった訓練をやっている頃に、大都會が空から襲撃されて、いっぺんにバアツと火の海になつてしまうような暗示が出た。暗示は1回きりです。それ以後はもう全然ありません。

霊界人の警告をどうしようか迷つていました。暗示が出た後は主宰していた財団法人を整理しまして、昭和19年に故郷の大和へ帰りました。

百姓の師も霊界人

大和へ戻つて、牛や牛車を買つたり、鋤すき、鋤くわ、犁かたすきとか農具一式を全部用意して、言われた通りに百姓を始めました。うちの土地で働く小作人の姿を見ていましたので、自分は百姓のしかたを知つてゐるつもりでした。でも実際に、我が自身が鋤を握つてやったことはまだなかつた。

それが突然、朝でもどてらを着て肥担桶を肩に乗せて、田畑へ出て行く。すると周りの人たちが、「ちよつとまあ、親御さんかわいそうに。せっかく東京まで行つてはつたのに、あんばい頭狂うてしもうて。ほんまに蛙切りかむ(水呑み百姓)やらはる」といった声もかなり聞かれました。それはもう私の場合、何も経験がありませんから。けれども、たくさんおる霊界人の友達から出てきて、仕事のしかたを教えてくれるわけです。

例えば夏になると、牛も飼つてますし、しょつちゅう草刈りしないといけない。でも草刈りなんてしたことがない。鎌一つ持つて畑の畦へボツと



で、手の力をポツと緩めますと、その手がまた勝手にパーッと動いて、大便と小便を杓でかき混ぜる。ある程度混ぜ終わったら手が止まるので、肥担桶にスツと肥をすくい取ります。3杯ぐらい入れたとたん、手がまた止まってしまふ。まだ慣れてませんし、担ぐと肩が痛い。ああ、肥の量を少なくして、肥担桶を担ぐけいこさしてくれるんやな。そう解釈して、軽

行きました、これどうやって刈ったらいいのかなあ、と考えていると、手が勝手にパーッと動きだす。じつに自然な手つきで草を刈っていくんです。おかしいな、おかしいな、と思いつながら、勝手に動き続ける自分の手を眺めていました。そんな面白いことがあってみたり。

また、肥担桶を担いでいく最初の時もそうでした。田舎は便所の壺が大きくて、下からバアツと跳ね返らないように、みな壺へ糞を放り込みます。その糞の上へ大便していくと固まって、島みたいになる。そのぐるりは小便ばかりで、チャブチャブになっている。

うちらは冬に水田で麦を作ります。麦の肥かけしに行く時、壺の固いところをよけておいて、小便のところをさっさと肥担桶に汲もう。そのほうが楽だと、経験のない者は考えます。

それで長い大きな杓を持って肥壺の中へパツと入れましたら、突っ込んだ手がどうやっても抜けない。いくら力入れたって。こんなこと言うとおんなたちね、めったに信じられへんから、こら氣違いの言うことですが。

い荷で麦畑へ行きます。

麦畑に近い小川の所まで行くと、今度は腰が力クツと折れまして、いつぱんこの肥担桶が下へパツと落ちます。腰の力がスポンと抜ける。その横に小川があつて、持った肥担桶、ピュツと水の所へ勝手に回って行く。ああ、肥担桶に水入れよ、ということやなと考えて、水を入れる。霊界人はこういう教え方です。普通の百姓の人に聞いたつてね、初めての者にこんな仕事のやり方は覚えられせんよ。

牛を使って耕す時も、犁持った手が勝手に動くという教え方です。知らない間に牛の使い方を教わつて、うちの出入りの人なんか「いつの間にかいこしはつてん」と言うんやけど、「いや勝手になるんやがな」つてごまかしておりました。

死を知つたうえで生き方

まあ一例ですが今挙げましたとおり、肉体を持たない友達ですね、私にはたくさんおります。こんなこと言ったらあんなたち、非常に便利だろうなと考えるでしょう。でも、得手勝手な欲を出したら絶対にいけません。

このごろ私、よくテレビを見ております。奈良も東京も番組はそう変わらないでしょうが、霊能者とか靈感者とかいう人、最近ちょいちょいテレビに出てきます。こんなのはみな、その人なりの器と言いますかね、またそんな役まわりがありますのでね。

今世に持つて生まれてきた本当の宿命、あるいは使命と言うか、仏教的には一大事の因縁とも言いますけど、では私の場合、本当のお役目は何だろうかと。自分ではいまだに疑問なんです。まあ、今も実験の途中ですので、棺桶へ入る寸前になつ

たら、何だったのか言えると思います。

私の日頃の態度の中には、自分の意志もありますが、私以外の霊界人の意志もある。その両方で私は生きさせてもらつております。

霊界人は死後の世界における人で、肉体を持つていません。ですから、肉体を持った以上、人は必ず死ぬ。このことだけをね、いつでも覚えておけと言つてきます。

誰でも知つてるでしょ、そんなこと。知つても、それを覚えとけと。いくら偉そうなことを言つたところで、百までめつたに生きられないから、死ぬということをよく知れと。で、死ぬということを知つた場合に、知つたうえでおいての生き方をしろと。これはもう霊界人がずいぶん言う。私もくどくど言われてきました。

霊界人に言われた通り生き、今日まできておるだけで、紫陽花邑の精神というのは、別に精神も何もないんで。氣違いの言うことですが、霊界人と共に私が寝起きしながら今日まで生きさせてもらった間に、紫陽花邑みたいなのができあがつてしまった。勝手にできたんですよ。私はひとつもね、こんなもん作ろうと思つてません。けど、できてしまった。

焼け野が原の街頭に立て

つまり、私が自分自身を試すつもりで、いろんな事をしていくうちに、今のような、まあ、共同體とかね……私には紫陽花邑を作ろうとした意圖が何もありませんので、水津さんのようにユートピアなんて言つてもらつたら、何かもうこそばゆくなつてしまいます。

どうして紫陽花邑ができたのか、という源流はね、ちょうど終戦の翌年ぐらい。霊界人が今度は

「お前、宗教でいけ」と言うんです。

宗教でいけと言われても、私は嫌いなんです。現在のいわゆる既存宗教は、宗教の本質から外れていきますよ。宗教を名乗っていろいろ商売している団体と言ってもいいくらいです。本来の宗教じゃない。

あんな真似するの俺イヤだな、と思っていたのに、霊界人は宗教をやれと言う。だけど具体的に

再掲 東京への旅・報告書

— 『すさのお』第56号

(昭和46年5月23日発行) より

過密都市東京の中心、新宿駅前のスバルビルで、去る四月二十五日「紫陽花邑をめぐる日本のユートピア」と題する講演会が催され、二十数年ぶりに法主様が東京で講演をされた。

この講演会は、すさのお東京会、日本協同体(キプツ)協会、フレンズ国際労働キャンプ(FIWC)関東委員会の共催で行われ、過密にあえいでいる東京に古代人がもっていた大らかな気風を少しでも甦らせようという意図から生まれたのだそうである。折しもユートピア集団研究者の水津彦雄氏(日大助教授)が大平出版社より『日本のユートピア』を出版された直後であり、この講演会は水津氏の出版記念の会の意味も兼ねて行われたのである。

講演会は、水津氏が「日本のユートピア」、法主様が「紫陽花邑に流れる精神」というテーマで行われた。水津氏は、著書『日本のユートピア』の中でとり上げた六つの日本の共同体の成り立ちや思想的背景などについて話をされ、細部にわたっては、参加者と質疑応答をして講演で漏れた箇所を補われたのである。

何をするのか聞いても、まあ生きとつたらいいやないか、という程度にしか言いません。

ところが突発的にね、「いっぺん街頭に立って、お前、またひとつほら吹いてみたらどうか」と霊界人に言われたんです。

昭和21年ごろ、大阪は焼け野が原になっていましたし、国民は日本人としての魂を失って、精神的にもすべてアメリカさんに帰属している。アメ

法主様は、「紫陽花邑に流れる精神」というテーマで一時間話をされたのであるが、何ととっても約二十六年間もやって来たことの精髓を一時間余で纏めるといふのだから並大抵のことではない。

とくにポイントを「紫陽花邑がどのようにして生まれて来たか」という点において話をされ、他のユートピア集団のように意図的にやったのではないということ強調されたのである。そして人間が神ながらに生きてゆくことがどれほど大切であるかということの色々例を挙げて話をされたのであった。

講演会の後、記念パーティーが行われ、出席者全員の賑やかな交歓会が行われたのである。以下、今回の講演旅行を写真によって紹介してみたい。(※以下、文のみ再掲・写真省略)

【第一日】熱田神宮に参拝して上京

時既に初夏の気の漂う四月二十四日、自動車にて大倭を出発。名神、東名高速道路を経て上京すべく京都をめざして快走していたが、山田川をすぎてもまもなく、法主様より「熱田神宮より迎えがあった」という話があり一行は急遽伊賀、伊勢路を経て熱田神宮に参拝することになった。

熱田神宮は、日本神話の八岐大蛇の尾から出たといわれる草薙剣をご神体としているが、熱田の

リカさんが右と言えば日本人はサーツと右を向く。左と言ったらサーツと左を向く。占領治下ではやむをえないけれど、社会がそんな現状なので、とにかくやってみろと。

私は素直ですし、霊界人に言われたら絶対後には引けません。ま、やってみるよと。それでやってみたら、宗教の街頭布教じゃなかったんです。(次号に続く) 文責・編集部

神々と法主様との間に如何なる話し合いがなされたか興味深いものがある。

【第二日】講演会と記念パーティー

翌四月二十五日東京の空は澄み切っていた。午前中東京在任の大倭人平山久夫妻宅を訪問。

講演会は新宿駅前スバルビル集会室で午後五時より開かれた。又「むすびの家」建設の主役者で東京在任の懐かしい面々も見かけられた。記念パーティーは賑やかな交歓会となった。長谷川進(元・法大教授)、判沢弘(東工大助教授)、縫田清二(横浜国大教授)、村松仙太郎(明星大教授)などの人が若者たちと共に出席された。

【第三日】鎌倉を訪れる

四月二十六日、平山夫妻と共に新緑の鎌倉を訪れた。鎌倉は源頼朝が武家政治の幕府としてから栄えた町であり、日蓮聖人の古蹟も数多い。鶴岡八幡宮に参拝した後、頼朝の墓に詣でた。頼朝の墓は山の中腹にあり、苔むしたささやかな墓であった。鎌倉宮、日蓮聖人辻説法の故地を訪れた後、由比ヶ浜を経て龍の口を訪れた。龍の口は聖人が首の座に置かれ、神助により虎口を脱した霊地である。鎌倉を後にするころは薄闇の迫るころであった。

じんずうりきによせ

「神通力如是」の真意をさぐる 第十九回 大倭教の源流にさかのぼって

前回に続いて今回は、中将姫が本格的に登場し、自身(再誕も)の数奇な生涯を語ります。頭幽の世界の複雑さに思いを及ぼさないと、歴史の実証的な時間軸との矛盾に困惑されるかもしれませんが、深読みしていただけるとさいわいです。

現代語訳で「中将姫・輪孺香」と発言者を二重表記したのは、霊統でつながるお二人が入り混じって発言しているためです。

原文(11月15日午後10時)の続き

「吾ハ、中将姫。

吾レオサナクシテ母ニ別レ(泣く…)

藤原豊成ノ女ト生レ、何ノ前世ノ因果カハ知ラネドモ(泣く…) 母上、ナゼ死ニナサレタカ… コノ姫ヲ遺シテ… ナゼトモニ連レ玉ハナカッタカ。今ノ母

(成川さだ)ハ、ヤサシキ人ナレド、心ノウチハ吾ガ身ノカタキ。コレハ吾ノ罪障ナラン。吾レ太子ノ妃トエラバレ、嫁グ日ノ来ルノヲ樂シミニ日々暮シ居レド、誰ノ讒言カ知ラネドモ、コノ身モカマハズ、吾ガ父君モミ心イタマセラレ、吾レ見ルニ忍ビズ、ウバ一人連レ家ヲ出デタリ。

吾レ題目唱エルハ、亡キ母ノ菩提ヲ弔

フ為、母ジャ人ノ心ノクモリヲトル為、

亦タイトシノ君ガ菩提ヲ弔フ為。コレモ

母一人ノ罪ニハアラズ、吾ガ身ノイタラ

ヌ為、共二題目唱ヘ、コノ罪障消滅ナサ

ン。題目、

父上、姫ヨリオ願イタシ奉ル、母(中

将姫の)ハ斯クシテ姫ノ母(輪孺香の)

トナリ、人ニハヨク、心ノウチ、吾レニ

ハヨクワカレドモ、唯一ツトケ合ハヌ事

ノ為、ソノ為心ハ夜又トナリ、吾ガ身ニ

ツラク当リシガ、姫ハ少シモウラミマセ

ヌ。コレモ前世ノ約束ゴト、父上、母上

ヲオアハレミ玉ヘ。姫ヨリモオ願ヒ致シ

マスル。中将姫、奇稲田姫命ノ御前ニ誓

ヒ申ス」

「有難キオ言葉ノカズカズ姫今日ノ日ヨ

リ生レ変リテ、真ノ妙法唱ヘ申サン。南

無妙法蓮華經。

アーウレシヤナー今日ノ日カラ我ガ生

ミノ母ガ生レ変リテ吾レヲ守リクレン。

母上、吾ガイタラヌ所ヲ何卒御許シ下サ

レマセ。是レカラハ真ノ親子トナリ、心

一ツニナリ、樂シク日々ヲオクリ申サン。

長ラクノ間、吾ガ為ニ恐レ入り奉ル。オ

ハカリ下サレシカ母上。姫コノ上ノ喜ビ

今日ノ日ホド嬉シキ日ハアラジ。父上ナ

ゼ居マセヌカ、母上家ニ帰リテ父上ニ伝

ヘ下サレ。姫ガ悪カッタト、オッタヘ下

サレ。今ノ世ニ於テノ妹(成川富美子)

フピンナ者ニ候ヘバ吾レト思ヒテミテ下

サレイ。吾レ前ノ世(中将姫の時)ノ

思ガカナヒ、奇稲田姫命ノアタタカキミ

恵ニ浴シ、太子(日聖)ノモトニハベル

ナリ」

附言

中将姫は成川栄三郎、しなの間に生まれし輪孺香の前身なり。今母さだは後妻なり。太子は矢追日聖なり。奇稲田姫命の御神示により昭和十一年三月十一日、日聖(隆家)輪孺香(成川静枝)結婚せり。夜中(十四日)中将姫参り仔細を語る。

豊成は父成川栄三郎の前身なり。讒言せしは太子の乳母、局なる狭衣姫これ今の後妻、成川さだなり。中将姫の母亡くなるや豊成の後妻に狭衣姫入る。すぐ女子小百合姫を生む。この姫輪孺香の妹富美子なり。この縁が富美子生れた時よりさ

だは一切を世話す。中将姫宮仕えに登りし時は、十六歳。この時より(太子の)許婚となる。而るに狭衣姫太子の寵にあずかるにより吾子小百合姫を妃にせんとはかる。ここに狭衣姫、中将姫をなきものにせんと夜叉の働きをなす。

或る時中将姫を座敷牢に入れ計りて男を連れ来り、惨たり、中将姫の節操をうばいたり。この一事を以って太子との縁を完全に断ちたり。父豊成も狂わんばかり。終に姫意を決して出家なす時に中将姫二十二歳、太子二十五歳。今世に於ける日聖と輪孺香の縁はさだの真心により結実す。

この夜座にあるもの声を出して泣けり。日妙神通にて見るにこの因縁真実なる証さる。

「吾ハ、大倭鷄杜、奇稲田姫。
姫、ワカツタカエ、真ノ妙法トナヘ、心シヨウジヤウニモチ、吾ニ仕ヘ候ヘ。吾モ嬉シク思フゾヨ。吾レ唱ヘシ真ノ正法、妙法、、妙法、、妙法、、

中将姫(両手ヲツキ)
「モツタイナヤ、奇稲田姫命、君ノ命ヲ待チ申サズ、吾レ独リノハカラヒニテ物語ヲナセシニ、才叱リモウケズ有難キ言葉ノカズカズ身ニ余ル喜ビ、何ニタトエム、有難クオウケシマス。デハオイトマ

チヨウダイ仕ル」

註 釈

① 藤原豊成（さむらひのよなり）

704〜765。奈良中期の公卿。武智麻呂の長男。母は阿倍貞吉(真虎)の女。仲麻呂の兄。南家。内舎人として出身し、724年従五位下に叙され、749年右大臣に昇る。橘奈良麻呂の変に連座して太宰員外帥に左遷され、惠美押勝の乱後に右大臣に復し従一位に昇る。才学の聞えがあったという。

(山川出版社『日本史人物辞典』による)

② 前世1因果

⑦ものには必ず原因があるという道理。

①特に善悪の業によってそれに相当する果報を招くこと。(果報…前世の行いのむくい)

(岩波書店『広辞苑』による)

③ コノ身モカマハズ……略……家ヲ出タリ

自分の身もかまわず(どうなるうとも)、父が心を痛められているのを、見るに忍びず、(とにかく)乳母一人を連れて家を出ました。

④ 菩提ヲ吊フ

死者の冥福を祈って読経など、供養を行う。

菩提とは世俗の迷いを離れ、煩惱を断つて得られたさとり智慧とか死後の冥福のこと。

⑤ 罪障消滅

罪障とは仏語で往生・成仏など善果を得るさまたげとなる悪い行いのことであるが、そうしたさまたげになるものを消滅させること。

(④⑤ 小学館『日本国語大辞典』による)

⑥ 父上

この後の「附言」に「…豊成は父成川栄三郎の前身なり。…」とあるので、ここでは「父・豊成と父・栄三郎」の二重の意味あいと呼びか

⑦ 夜叉（やしゃ）

人を害し、取って食う猛悪な古代インドの鬼神。のち仏法の守護神となり、羅刹とともに毘沙門天に仕えて北方を守護する。

(福武書店『福武古語辞典』による)

⑧ 我ガ生ミノ母ガ生レ変リテ吾レヲ守リクレン

ここに言われているのは前回(神通力如是第十八回)霊と霊で対面した母と娘。すなわち輪孺香が倭姫であった時に、その母であった現今の生母(日聖の母・輪孺香の姑)が生まれ変わって、私(輪孺香)を守ってくれるとの意と解される。

⑨ 局（やく）

宮中や公卿・将軍家などに仕え、重要な地位にある女性を敬つていう語。

(三省堂『大辞林』による)

現代語訳

(11月15日午後10時の続き)

中将姫・輪孺香「私は中将姫です。私は幼い時に母と死に別れました。(泣く……)

藤原豊成の娘として生まれ、自分の前世に何が あったか私には分かりませんが。(泣く……)

母上、なぜ私を残して早くに亡くなったのですか。なぜ一緒に死なせて下さらなかったのですか。今の継母(成川さだ)は優しい方ですが、心の中では私を敵のように思っています。こうなったのは私の前世の罪障でもあるでしょう。

私は太子の妃として、太子に嫁ぐ日の来るのを楽しみに日々を暮らしておりましたが、誰の謀りごとかは分かりませんが、おとしめられ、自分の身がどうなるうとも、父が心を痛められているの

見るに忍びず、ともかくも乳母一人を連れて家を出ました。

私が題目を唱えるのは、亡き実母の菩提を弔うためであり、継母の心の曇りを取るためです。また、愛しの君である太子の菩提を弔うためなのです。この謀りごとも継母一人の罪ではなく、私自身の至らなさのためでもあります。

父上、私からお願ひしたいことがあります。私(中将姫)の継母は因縁によつて今世は輪孺香の継母となつたのです。だから、他の人に対しては良い人であっても、その心の中は私にはよく分かるのですが、唯ひとつ(過去の因縁により)心が溶け合はぬことのため、継母の心は夜叉のようになり、私に強く当たられます。でも私は少しも恨んではいません。この事も前世からの約束ごとなのです。父上、継母を憐れんであげてください。私からもお願ひいたします。私、中将姫は奇稲田姫命の御前でお誓ひ申し上げます」

中将姫・輪孺香「これまでの有難いお言葉の数々をいただき、私は今日の日から生まれ変わつて真の妙法を唱えさせていただきます。南無妙法蓮華經。

ああ何と嬉しいことでしょう。今日の日からは私が倭姫であつた折に母であつた方が、現在の義母(日妙・法主の母)となつて、転生され私を守つて下さるのです。

継母上(成川さだ)私の至らぬところは、どうかお許し下さい。これからは本当の親子となり、心を一つにして楽しく毎日を過ごしていきます。長い間私のために心を悩ませ恐れいます。お分かりいただけましたか継母上。私は今日ほど嬉しい日はありません。

父上はなぜこの場所におられないのですか。継母上が家に帰られたなら父上に「私が悪かった」

とお伝え下さい。今世においての成川富美子はいかがでしょうか。私にそうな子ですから、私と思つてみてやって下さい。私は前世(中将姫の時)の想いが叶い、奇稲田姫命の温かいお恵みに浴することが出来、太子である法主の妻としてここにいます」

附言

中将姫は成川栄三郎、しなの間の子である輪孺香の前世で、今の母(さだ)は栄三郎の後妻である。太子は矢追日聖である。奇稲田姫命の神示によつて昭和11年3月11日、日聖(隆家)と輪孺香は結婚した。

夜中(14日)輪孺香に中将姫が神憑りして事の仔細を語る。

豊成は輪孺香の父・成川栄三郎の前身である。謀りごとをしたのは太子の乳母で局のお役目であつた狭衣姫。今の後妻成川さだである。中将姫の実母が亡くなると、豊成の後妻に狭衣姫が入り、すぐに女子・小百合姫を生んだ。この姫が輪孺香の妹、富美子である。この過去世の因縁があつて富美子が生まれた時から、さだが一切を世話した。中将姫が宮中に仕えた時は16歳。この時から太子の許婚となる。しかるに狭衣姫は太子に気に入られていたので、自分の娘を太子の妃にしたいと考えた。狭衣姫は中将姫をなき者にしようと悪巧みを実行する。ある時中将姫を座敷牢に押込め、そこに男を連れてきて無惨にも姫の節操をうばつた。この一事をもつて太子との婚約破綻となつた。父豊成は狂わんばかりの心となる。

ついに姫も意を決して出家することになった。その時中将姫22歳、太子25歳であつた。今世において日聖と輪孺香が結婚できたのは、回心したさだの真心によつて結実したものである。

この夜、同席した者たちは声を出して泣いた。日妙が神通力によつて霊界を見たところ、この因縁

縁話しは真実であるとあかさされた。

奇稲田姫「私は大倭橋社の奇稲田姫です。中将姫よ(※14日・15日にわたるあなた達の因縁因果の真実の意味が分かりましたか。真の妙法を唱え、心を清浄に保ち私に仕えなさい。私も嬉しく思います。私が唱えるまことの正法、妙法・・・妙法・・・妙法・・・」

中将姫(両手をついて)「もつたないことです。奇稲田姫命、あなた様の命を待たずに私の独断にて物語りをしましたのに、お叱りも受けず、その上数々の有難いお言葉をいただき、この身に余る喜びを何に例えればよろしいのでしょうか。(※奇稲田姫命に仕えよとのお言葉)有難くお受けいたします。

それではおいとまちようだいいたします」

追悼 見田宗介さん帰幽される



大倭とも縁のあつた社会学者の見田宗介さんが、去る4月1日に84歳で帰幽されました。

見田さんは、個人の自由を重んじつつ他者とも深く共感して生きていける共同社会のあり方を、独自の世界観から追求し続けたユニークな思想家でもありました。

見田さんが初めて大倭や法主様と出会つたのは、自らが提唱者であつた「泡沫コミュニン」の合宿を、昭和51年に交流の家で開いた時のことです。見田さんは、真木悠介の名前で発表された『氣流の鳴る音』で紫陽花邑について言及しました。それを讀んだ多くの若者達が邑を訪れてきて、当時対応に当たつた交流の家管理人の飯河四郎さんは「氣流族」と名付けていたものです。(T)

あじさい日誌

4月8日 大倭大本宮で須佐緒祭が行われました。この日は昭和42年4月8日の法話をお聞きしました(本紙未掲載)。

4月10日 午前9時から大倭墓地の大掃除、1時間弱で終了。

4月15・17日 FIWC関西委員会のメンバーがスタディツアーとして、宮城県気仙沼市唐桑町訪問。報告文が楽しみです。

4月16日 午後6時から大倭会館で大倭町自治会役員会。

4月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は昭和42年4月23日月次祭の法話をお聞きしました。この日発行の本紙4月号に「神ながらの宗教・自然の流れに沿う」として掲載分です。

4時から大倭会館で大倭会役員会。下段の大倭会通信参照。

4月25日・5月2日 大倭会館前、西齋庭の会所樹を撤去して排水工事が行われました。

4月26日 齊藤恵子さん(賑栄い塾のメンバー、千葉県)の案内で香取芳枝(千葉市)・駒形一登(新潟県長岡市)・さんが来邑。秀真伝の研究仲間の由。教務本庁で岸田哲・高橋良美・杉本順一さんと歓談、その後、大倭神宮にお参りされました。

5月1日 午後2時から大倭会館において教長家麻呂さんを祭主に、故井手泉さんの五十日祭

が行われました。

5月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。大倭安宿苑では(菅原園)

4月30日 ホットケーキを焼き、久しぶりのおやつ作り。(須加宮寮)

4月19日 有線放送で懐かしい曲を館内に流しました。(長曾根寮)

4月17日(特養) 外気浴で残っている桜の鑑賞を行いました。

4月25・30日(テイ) 鯉のぼりの作品づくりをしました。(茂毛路園)

5月4日 5月生まれの3名の方の誕生会を行いました。(八重垣園)

4月11日 お花見を兼ねて、八重垣園周辺を散歩しました。

あんない

*月次祭(大倭神宮) 6月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会 6月12日(日) 中止。6月は12月とともに大袈ぎの月です。各々の場所でお掛けしよう。

*月次祭(大倭神宮) 6月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大本宮) 6月23日(木) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

大倭会通信

令和4年度第1回役員会、出席者10名。昨年度から冒頭に一人一人に話してもらう時間を設けました。都合で不参加の方々が寄せて下さったメッセージも披露して、お互いの交流を深めるようにしています。今回も、たけのこ掘りや入れ歯の話からウクライナ情勢に至るまでの話題で賑わっていました。

議題は令和3年度の会計報告及び令和4年度の事業計画と予算についてでした。現在の大倭会の会員数は約120人で、予算規模は400万円弱のさやかな活動体ですが、発足当時の志を大切にしながら着実に歩んでいきたいと思っています。

こしはばくはコロナ禍の影響で、文化行事や文化講演会など中断せざるを得ない状況が続いていますが、次につなげる準備の一つとして、ここ数年の文化行事の活動記録を冊子として発行しようという予算が承認されました。完成したら、是非手に取って下さい。以下、寄せられたメッセージより要約抜粋しました。

6日・15日・23日はこちらでもお祭りをしています。

▲大阪府枚方市 林 修三

……夕方より塾での授業があり欠席させていただきます。今は雌伏の時かとも思われますが、法主様が望まれた大倭会の姿に向かって模索をしていきたいものです。

▲三重県名張市 且田容子

……井手さんの計報に驚いています。井手さんは生前より法主さんに託されていたのかどうか？知りませんが、「神倭聖徳法主日聖奥津城」の墓碑を書かれた方です。今は向こうで法主様に会われたでしょうか。

▲群馬県安中市 桜井節子

……4月2日、私用で急に大倭に行き、思いがけなくお花見もして無事に帰路につきました。

2月24日、ロシアがウクライナに侵攻と耳を疑うニュース。3月23日にウクライナ大統領が日本の国会でオンライン演説をして、すぐ後に『とおやまと』3月号が届きましたので、より注意深く拝読いたしました。もしかしてこの戦も世界平和への扉なのかもしれない。人間一人一人、本質的には善人も悪人もないということも理解はできません。大自然は私達を平等に生かしてくるのに平和は多くの犠牲を伴わなければ築けないのが、人間としてとても悲しい、心の重い日々が続いています。

波紋

令和4年1月 不知火書房刊
夢野久作と杉山三代研究会 会報『民ヲ親ニス』第8号 を読んで

杉山家三代の核は真である。また成すべき事の推進力は並はずれている事である。

第一代、杉山茂丸氏は、政界・財界で常識を超えた活動していたので「ホラ丸」と呼ばれていた。

第二代、夢野久作(杉山泰道氏)は、今も読者の想像力を刺激してやまない。『鬼滅の刃』は夢野久作著『ドラ・マガラ』のオマージュ作品なのでは？

第三代、杉山龍丸氏は、ヒマラヤからインドに水を引く話など常識を超えた話をして「ホラ男爵」というあだ名が付いたという。龍丸氏が中学生の頃、儒教の四書のひとつ『大学』を学び、「大学の道は明德を明らかにするに在り、民に親しむに在り」と大声で読んでると、父・夢野久作に、「杉山家の人間はそんな読み方をするな。『民を親にするに在り』と読むのだ」と怒鳴られたそうです。

家訓『民ヲ親ニス』を代々実践した証言の会報です。矢追日聖「故杉山龍丸さんを追憶す」(『とおやまと』昭和62年10月号より)の記事も載っています。興味のある方は編集部・岸野さんまでどうぞ。(松本モト)

▲岡山県真庭市 湯浅芳郎

……コロナ禍や戦争で世上騒然、心が落ち着かないことです。出雲街道の宿場桜が満開で出店やウォーキングで賑やかです。